郭沫若全集

第Ⅱ期

第四卷

日記4

郭沫若全集

江苏工业学院图书馆
藏书章

第Ⅱ期

第四卷

岩波書店

野上彌生子全集
第II期 第四巻
第五回配本
（全二十六巻）

一九八七年三月六日　発行

定価四〇〇〇円

著者　野上彌生子（のがみやえこ）

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三-二六五-四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・精興社　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 野上素一 1987　Printed in Japan
ISBN 4-00-091154-6

日

記

四

目次

昭和八年……一
昭和九年……二四六
昭和十年……四三
後記……六五三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

昭和八年

一月一日　日　快晴、

素一をのぞいてみんなで朝のざうにを祝ふ。

父さんは洗足や学校や夏目さんに廻るため、帰寮するモキとつれ立つて外出。モキはがっつきの友だちと休みの間しづかな寮でなほ大にガンバローと云ふのである。それもよいとおもふ。彼はたしかに学究の生活が出来さうだ。

父さん夜に入つて帰宅。洗足の家が急に岡山に転任することになつた由、孝平さんだけ明夜たち、あ〔と〕の人ゝは三月に立つ。――この間老人たちの家が出来たばかりであるのに、さぞ残念であらう。それに浩ちやんたちの転学などをおもふと。――

一月二日　月　寒い曇。

父さんは今日から九段偕行社のホテルに仕事に昼間だけ行くことにする。研究社からのショオの評伝をまとめるため。――一日三円五十銭の由、地方の宿やなどに行つて、避寒客の中でごた〳〵するよりはその方がよいと云ふことになつたのである。

道家チヤさんと孝平さん来る。

夜をり本保子来る　弟があげられた話。婦人洋服の職人の話。支那人に及ぶものなし。宮内省カンケイの洋服。アズレ(ママ)の話

一月三日　火　晴

父さんは今日偕行社。

松浦氏。つゞいて岡夫妻。学校のさわぎのことをきく。もつと有力な第三者の言を一度きいて見度い。

ヴァージニア・ウルフを買つて来て貰ふ。

一月四日　水　寒いくもり。

高田かねちゃん子どもづれにて例年のごとく来る。

午後は小山〔久〕二郎、原稿を渡す。夕方岩波夫人。

Yは代数の本のことにつき学校に行つたので、そのついでにモキに羊かんをことづける。夜は父さんと三人で本郷座に行く。

年賀郵便を今年はみんな引きうけてゐるので毎日それに多くの時間をさかれる。

一月五日　木　晴

新潮をよむ

平塚夫人来訪。うちの広雄の話。夕方五時まで。台湾の話はおもしろい。中川総督とは同輩なのでやりにくいらしい。蕃地旅行の話。カズの子のにつけ。やしのみの汁。藤のしんのにたの。びんら

うじのしん。さう云ふ御馳走をたべた由、
動坂まで送る。パナマのざうりとお茶を貰つた。布川さんが玄関まで。夜は小山二郎が書物の組み方のことで来訪したが逢はず、父さんだけに逢つて貰ふ。
麻生にお菓子一折送つた。
夜より雨

一月六日　金　冷たい雨

朝素一帰宅。雪にやけて強健なかほになつてゐる。
丸池ヒュッテに浦和の連中二十余名と泊り込んでたのしく辷つたらしい。山にも三つのぼつた由、とろゝ汁ばかり。元日にもざうになし。熊の湯まで三里すべ〔つ〕ておぞうにたべに行つた。

一月七日　土　晴

〔欄外二〕父さんが今日で偕行社をきりあげた。
朝まだ残つてゐた年賀状をかいたり、手紙かいたり。国にカマボコの代とおもつて五円送る。安田さつきの寄附金五円。昨夜ねてからしぶざわさんから電話があつたと云ふので今朝かけて見る。孝子さんが出て来た。もう帰つたのださうな。元気のない声をしてゐた。いろ〳〵年内に世話になつたお礼が云ひたかつたのだと云ふ。
亨三さん午後来訪。Sと二人を連れ、ジャマンベカリでお茶をのみ、邦楽座にブロンド・ヴィナスを見て帰る。ディートリッヒのもつ魅力は現代がもつもつとも特異なものと云ふべし。

この一二日新年号のものを少しづゝよんで見た。横光のなんぞ同じ拵へものにしても、今度は急ぎの仕事らしく、いつもの出来栄えがない。やつぱり時日をかけたものでなければ本味が出ないものらしい。その点やつぱり藤村のは立派である。

一月八日　父さんは今日から家で仕事。ひるまへ小野健人来訪。父さんの能を〔空　白〕が英文にしてもよいと云ふ意を洩らし、その用事をもつて来たのである。ひるはうなぎを出す。

私は今年は父さんの年賀状を一手にひきうけたので、いまだにぼち〳〵その用事がある。そのあとは雑誌のひろいよみなどで費す。今日からやすやぶ入り。夜父さんSと三人でシネマ・パレスにグレタ・ガルボのインスピレーションを見る。ストリはあまいものだが、筋だけは通つてゐる。グレタ・ガルボは北の国の神秘と直線をもつてディートリッヒに拮抗する。それにしてもたゞ円い眼や高い鼻が映画芸術に於て無効果なことを悟らないのはあはれである

こゝに来た時には、きつと帰りにやぶのそばをたべる。

一月九日　月　快晴

Yは今朝から学校。

ハックスレのPoint Counter Pointをよみはじめる。こんな傾向にあまりに感化されては私はならない。しかし日本の作物などをよむ時とはまるで異なつた感銘に捕へられる。

父さんは九日会のため修善寺旅行。弟子のもので五十才になつたものが、五十円の献金をする義務

がある。その金で旅行する規定となつてゐる。この一二年まへから誰かはじめた下らない規約である。先生の記念碑が修善寺に建つことになつたので、その土地撰定かた〳〵この月の会に修善寺がえらばれたのである。

一月十日　火　美しき晴

あたたかい日光にあふれた二階の廊下でハックスレをよむ。殆んど終日。――かゝるものをよむと、まだ〳〵自分たちは一生懸命腕をみがいて行かなければならないと思はせられる。拵へものも、これほど巧みに拵へあげられれば、自然以上である。ウォルターとマヂョリーとの感情の交錯は真をうがつてゐる。

今日からキリやど入り。

父さん九時すぎ帰宅。町の人たちからのおみあげとして、生ジイタケを一とかご。――先生の記念碑の建設地を九日会の人とにえらんで貰ふと云ふことになり、町会の招待の形で行つたので、町の顔役連が送迎したのださうだ。

会するものは夏目夫人、岩波、森田、松岡、林原、石原、松浦。――坂崎氏もちよつと来た由、

菊やのエハガキを見ると、宮殿のやうな大規模なものだ。湯治客の経験を私はほとんどしらない。

春にでもなつたら行つて見やうか。――しかしあんな家に、たゞかるいものでもよみながらぽかんと暮らすと云ふ生活に自分がたえられるであらうか。これはそれらの享楽に適しないと云ふのではない。そんな余裕を経済的にもたないと云ふ方がたゞしい。

〔一〕

十月十一日　水　あたゝかい晴

父さん今日より登校。

生理的変化の前じらせか、それともあまりハックスレで眼を使ひすぎたのか、軽る〔い〕頭痛がして、例の歯痛に似たものをかんずる。終日ぼかんとして暮らす。

注文のカマボコ国もとよりとゞく。平塚さんと大島さんに送る。

十二日　木　快晴

今日も家で読書すれば不快になりさうなので渋沢さんと岩波さんを訪ふ。渋沢さんは下の日あたりのよいざしきで、このまへよりは上機嫌であつた。

岩波夫人が和子さんを中野署へもらひ下げに行つた話をきく。つる〳〵にアメいろに光沢の出た階段をとん〳〵上りながら、古へびとの足おとをしのんだ。となりの坐敷が多分彼の居間であつた。そこから雄ちやんがあらはれた。すべてのおもひでは、快い詩として今はこゝろに浮ぶ。これはだれに対しても、すでに後めたからぬ思ひである。

十三日　金　曇、風強く、寒さきびし

今日は真子さんのところを訪問する約があつたので、風と寒さを犯して外出。青山のアパートはおもつたより内部は貧弱である。これでもう少し高級のものが今ではだん〳〵出来つゝある由、長い〳〵未婚生活ののちに、漸くにしてえらんだ巣がこれであるのかとおもふと、そのヒン弱な家具や装飾が、彼女のためにあはれにおもはれた。——しかし考へて見るに今日こんな感じを私に与へた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

のはひとつは天気だ。こんな、曇つた寒い日には、どこの家だつてインサンにものわびしい感銘をひとに与へるであらうから。
銀坐に出で、天金で食事。松やでトルネさんへあげるものや、その他のこまかい買ものをして、帰宅。
夜日ソの山田さん来訪。茶の間でいつしよに食事。

今日の朝日に河上肇氏が半歳行衛不明の後、中野の縁者の画家の家で発見され検束された記事が出てゐる。この二三日まへには大塚金之助氏が大仁署にあげられたことが報じられた。
河上氏は二三万円を党の資金にだして、今では経済的には可なり困つてゐたらしい。——無我の愛からついにこゝまで来た彼は、やつぱり普通の大学教授ではなかつた。

十四日　土、あたゝかい晴
二階の日あたりのよい廊下でまたハックスレ。——幸福。
午後岩波の雄ちやん遊びに来たり、夜までゐて帰る。
朝日の記者の訪問をうける。家庭欄に我家の自慢話と云ふやうな意味で、なにか家庭的のその家独特なやり方を話してくれと云つて来た。——そう云ふ話になると途方にくれる。自分ほど本質的〔に〕家庭的でなくて、完全に家庭的だとおもひまちがへられてゐるものも少なからう。
今新聞紙上で某重大事件〳〵と云はれてゐるものをきく。三つある由、一つは河上氏らの共産党共[ママ]

建。他は首相が開院式の日に順序をまちがへたとかでの不敬事件。今一つは戦死した馬占山の遺品として陸相がいろんな物品を天皇に見せたあと、一両日もしないうちに、ロシアから馬占山が旅券の下附を願ひ出たがどうしようかと云ふ照会があり、陸相が天皇を偽つたと云ふ不敬事件。――あとの二つはバカ〳〵しいものだが、天皇の名によつてそれほどに重大化するところに日本の政治の特種形態がある。

一月十五日　日、

ハックスレを了る。後篇はほとんど議論。ガイ念的になつてしまつた。

父さん夜は若林の結婚式で辛楽。燿三発病。今年は免がれるかとおもつたが、やつぱりダメであつた。下の子供部屋に泊まつてやる。

一月十六日　月、快晴

かねての約束で、午後からみのべさんと藤井さん。おうはんで夜の食事をだす。――昨日からその用意をしてゐたので、さうごた〳〵しないですんだ。

Yは今日から二階を病室とする。どうかあんまり長引かないですめばと、今はたゞそれをおもふのみである。下島先生の来診の時、小穴が新年号につゞけた二つの絵についてきく。彼が大きな疑問点をおいた芥川氏のほぞの緒についてゐた名前についてきく。芥川さんの生れた時は父が四十二、母が三十九才の二人とも大厄の年であつた。それ故一般の迷信に従ひ、彼を捨て子の形式にして、仲間の牛乳屋の松村氏の姓名をかり、松村竜之助としたのであるさうな。わけをきけば、何んでも

ないことを、小穴がヘンにその点に力点をおいたので、気の早い久米などは、芥川はほんとうはあの叔母さんの子供だらうなどゝ云ひ出し、それをきいて叔母さんが泣き出すと云ふさわぎが生じたさうな。――因みに、その叔母さんは今年七十六才の老処女である。

下島さんは、それについて文芸春秋にかいたさうな。

一月十八日　水

燿三病気なれど、キップが買つてあつたのでカブキに父さんとＳと三人で行く。

一月十九日　木　曇

燿三依然たり。婦人画報へ原稿を送る。

父さんは都富さんが今度満州に行くので、その送別会

〔欄外ニ〕昨夜の号外で第三次共産党の記事解禁。をりもとさんが引つかゝつてゐる。

一月二十日　金、うす曇、

燿三七度台を上下。

小百合さん来る

〔欄外ニ〕下谷風月の洋菓子おみや

モキちよつと帰宅。入学試験に要する写真を坂下町の大塚でとる。

一月二十一日　土　曇

燿三午後より六度台に下りる。髪を洗ふ。

婦人公論の湯川氏来訪。四月号の原稿のこと。柴田書記官長の息子が今度の共産党に加盟してゐる由

〔欄外ニ〕父さん京橋風月のカステラを買つて帰宅。

一月二十二日　日、雪、

昨夜十時すぎ頃からふりだした由、おきて見るとまつ白な世界になつてゐる。四五寸つもつてゐる。下島氏来診の時、また小穴について語る。竜ちやんは小穴さんを見そくなつてゐる、とをばさんでもおぢいさんでも云つてゐたものゝ由。金次郎、をりもと保子、市河さんから手紙。

一月二十三日　月　快晴

久しぶりに晴れ渡つた。雪にかゞやく日光、まだ消えぬ雪が庭樹にかゝつてゐる。塀の上にも。燿三のくびのひやし袋には昨日からこの雪を使つてゐる。今日は熱七度以下。今年はこれですみさうだ。どうかそれですむやうにと念ずる。あたゝかい二階の縁側で髪の手入れをさせる。父さんは夜評議会。

〔欄外ニ〕夏から大場さんに預けてあつたカナリアを今日うちに連れて来た

この間新年号からつゞいてゐる森於菟氏の父鷗外のことをかいた記事をよんでいろ〳〵感じさせられた。夏目先生の家との比較においてことに。――

小林幸子さんから手紙

二十四日　火　晴

燿三変化なし、午後より七度一分に上る。例年のことで気ながくかんごする覚悟になれてしまつた。
みんなに返事かいたりする。
夜は父さんはアララギの会で東京会館。
午後婦人の友の松井さん来訪。十年もう婦人の友をやつてゐる由

一月二十五日　水

燿三のまくらもとでハイヂをすゝめる
大した変化なけれど、七度二分までのぼる。

一月二十六日　木　晴

今日ふと道家夫人来る、Ｙの病気を耳にしたのかとおもつたが、さうではなかつた。彼女にたのまうかとおもつてゐたところで、好都合であつた。
今日はその外に××夫人、岡田さんとその友だちの長井さんが来る。
××夫人をタバタまで送る。彼女にもくるしい時が来た。××氏は少しも家庭的でない。その点××氏の方がずつとよいパパで、よいハズだ。――しかし彼女があの冷静をたもつてゐられるのはえらい。××氏なら、相手にしてゐるのも決して妙な女ではないと云ふ彼女の見当もたしかであらう。
若い美しいダンサかとおもふ。でなければ、夜三時までも彼の相手は出来ないはづだから

一月二十七日　金　晴、

しかしきびしい寒気である。

今度小山二郎によつて出版される『入学試験お伴の記』の校正をこの間からしてゐる。念を入れると午前はやつとそれだけの時間しかなくなる。
夜父さんは学校から馬込の渡辺さんの家へ行く。ウスキの中学連。
〔欄外ニ〕今井邦子氏より茜草を送つて来る。
河上肇氏が警視庁に収容される写真が出てゐる。

一月二十八日　土　晴

今日も燿三変化なし。なんにも出来ない。
今日は今井宅の会なれど不参。ハガキをだす。くにに〔十七ノ所〕ハガキと注文の黒ようかん。
父さんは田部さんの中世英文学史の出版を祝する会が銀坐のボストンにひらかれ、それに出席。Sは夜コニショを訪問すると云つて出かけたが、るすなので石黒によつて話しこんだと云つて十時すぎ帰宅。どこにでも臆面なくおしかけるのに少し呆れる。

一月二十九日　日　晴、寒気烈し。

燿三熱変化なし。のどのはれがとれるまでは仕方がないらしい。学校の鈴木さんからお見舞のハガキを頂いたので礼状をだす。
婦人の友の原稿を送る。（とおもつたのを忘れて二月一日に送る）
茜草の批評をかいてくれと富本さんを通じて云つて来た。Sは烏山に行く。

一月三十日　月　快晴

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c